南越前町

麻しん風しん混合（MR）予防接種説明書

予防接種を受ける前に以下をよくご覧ください。わからないことは接種を受ける前に医師にご質問ください。

≪病気について≫

■麻しん（はしか）

麻しんウイルスの空気感染（ウイルスが空気中に飛びだし、人に感染すること）によっておこる病気です。感染力が非常に強く、免疫を持っていない人が感染するとほぼ100％発症します。感染して10～12 日間の潜伏期間（感染してから症状がでるまでの期間）のあと、最初3～4 日間は鼻水、咳、目やになどのカゼ症状とともに、38℃前後の発熱が認められます。この状態が数日続いた後、一旦解熱するかにみえますが、再び39～40℃の高熱となり、全身性の発疹が現れ、高熱はさらに4～5 日続きます。発疹は、頬の内側に「コプリック斑（周りが赤く中心が白い口腔粘膜にできる粘膜疹）」がでた翌日頃から出現します。

麻疹に罹患すると、特異的な治療法がないため、感染から回復期までの約1ヶ月間は免疫機能低下状態が生じます。主な合併症としては、気管支炎、中耳炎、肺炎、脳炎があります。患者100 人中、中耳炎は5～15 人、脳炎は1,000 人に1 人の割合で発生がみられます。また、亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という慢性に経過する脳炎は約10万例に1 例発生します。麻しん（はしか）にかかった人は数千人に1 人の割合で死亡します。

■風しん

風しんウイルスの飛沫感染（咳やくしゃみ等により感染すること）によっておこる病気です。潜伏期間（感染してから症状がでるまでの期間）は2～3 週間です。軽いカゼ症状で始まり、発しん、発熱、首や耳の下のリンパ節腫脹などを主な症状とします。そのほか目の充血もみられます。発疹も熱も約3 日間で治りますので「三日ばしか」とも呼ばれています。約15～30％の人は不顕性感染（病気としての症状が出ず、知らない間に免疫だけができる感染のこと）で終わることが知られていますが、症状が出た場合は、特異的な治療法はなく、症状を和らげる対症療法のみです。

合併症として、関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。血小板減少性紫斑病は患者3,000人に1人、脳炎は患者6,000 人に1 人くらいの割合で発生します。年長児や大人になってからかかると一般的に重症になりやすく、高熱が持続したり関節痛の頻度が高いといわれていて、3 日間では治らないことが多くあります。

また、妊婦が妊娠早期にかかると、先天性風しん症候群（先天性心疾患、白内障、難聴等）をもつ子どもが生まれる可能性が高くなります。そのため、女性は妊娠前に予防接種を受けておくことが大切です。また、男性も、風しんに罹患して周囲の妊婦に感染させないために、風しんの既往の確認や予防接種について考慮する必要があります。

≪ワクチンについて≫

麻しん（はしか）ウイルス及び風しんウイルスを弱毒化してつくった生ワクチンです。予防効果は95%の抗体陽性率が認められています。患者の38%が10 歳未満と多いことから、1 歳になったらできるだけ早く定期接種の1 期MR ワクチンを受け、小学校就学前の1 年間（5 歳以上7 歳未満）に2 期MR ワクチンを受けます。お母さんが次の子どもを妊娠しているときでも、お子さんは接種を受けられます。

麻しん含有ワクチンは、ニワトリの胚細胞を用いて製造されており、卵そのものを使っていないため卵アレルギーによるアレルギー反応はほとんど心配ないとされています。しかし、重度のアレルギー（アナフィラキシー反応の既往のある方など）は、ワクチンに含まれるその他の成分によるアレルギー反応が生ずる可能性もあるので、接種の前にかかりつけ医に相談してください。

輸血又はガンマグロブリン製剤の投与を受けた人は、3 か月以上接種を延期してください。血液またはガンマグロブリンに含まれる麻しんに対する抗体のためワクチンの効果が減弱する可能性があるためです。また、川崎病等の治療でガンマグロブリン製剤の大量療法（200mg/kg 以上）を受けた人も同様の考え方で6 か月以上（麻しん感染の危険性が低い場合は11 か月以上）接種を延期してください。

また、妊娠中の場合は、麻しん風しん混合（MR）、麻しん、風しんのいずれのワクチンも接種することはできません。妊娠していない時期にあらかじめ約1 ヶ月間避妊した後、ワクチン接種を行い、その後2 ヶ月間避妊するよう注意する必要があります。

なお、麻しんワクチンは、結核に感染しているひとのツベルクリン反応を1 ヶ月間ぐらいは弱めてしまうことが知られています。麻しん風しん混合(MR)ワクチン接種と同時期にツベルクリン反応検査が必要な場合は、検査を優先して行うか、ワクチン接種後の4～6 週間後に行うことが必要です。

≪副反応について≫

このワクチンは弱毒生ワクチンでウイルスが体内で増えます。主な副反応は発熱と発疹で、1 回目の接種後2 週間以内に発熱が13%、発疹が3%見られ、通常は1～3 日で消失します。まれに脳炎や脳症が100 万～150 万人に1 人以下の頻度でおこることがあります。

≪予防接種の注意事項≫

1. 一般的な注意

(1)受ける予防接種について、この予防接種説明書をよく読んで、必要性や副反応についてよく理解してください。わからないことは予防接種を受ける前に質問してください。

(2)予診票は診察して接種する医師への大切な情報です。ありのままに記入してください。

2. 病気にかかった後の接種間隔

麻しん、風しん、水痘、おたふくかぜ等にかかった場合には、全身状態の改善を待って接種してください。

医学的には、免疫状態の回復を考えて次の間隔をあけてください。

麻しん(治ってから 4 週間程度)　風しん、水痘、おたふくかぜ(治ってから 2～4 週間程度)

突発性発疹、手足口病、伝染性紅斑(治ってから 1～2 週間程度)　普通感冒や上気道炎(治ってから 1 週間程度)

3. 予防接種を受けることができない人

(1)明らかに発熱のある人(明らかな発熱とは、接種場所で測定した体温が37.5℃以上を指します。)

(2)重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな人。急性の病気で薬を飲む必要がある人は、その日は見合わせるのが原則です。

(3)予防接種の液の成分でアナフィラキシー(接種後30 分以内に出現する呼吸困難や重いアレルギー反応)を起こしたことのある人。

(4)その他、医師が接種不適当と判断した人。

4. 予防接種を受ける場合、医師とよく相談しなくてはならない人

次に該当すると思われる人は、かかりつけの医師がある場合には必ず前もって相談して下さい。

(1)心臓病、腎臓病、肝臓病や血液の病気及び発育障がいなどで治療を受けている人。

(2)予防接種後2日以内に発熱及び、全身性の発しんなどアレルギーを疑う症状がみられた人。

(3)接種しようとする接種液の成分に対して、アレルギーの症状が出るおそれのある人。

(4)今までにけいれん(ひきつけ)をおこしたことがある人。

(5)過去に免疫状態を検査して異常を指摘されたことのある人、近親者に先天性免疫不全症の方がいる人。

(6)家族、接触のあった友だちなどに、麻しん(はしか)、風しん、おたふくかぜ、水痘(みずぼうそう)などの病気が流行している時で、予防接種を受ける本人がその病気にかかっていない人。感染して潜伏期間(症状が出ない期間)中の場合がありますので、かかりつけの医師と事前によく相談してください。

5. 予防接種を受けた後の一般的注意事項

(1)予防接種を受けたあと30 分以内に、急な副反応がおこることがあります。
接種後は安静に待機し、体調に変化がないかどうか様子をみてください。

(2)接種後は、4 週間は副反応の出現に注意してください。

(3)接種部位は清潔にしてください。入浴は差し支えありませんが、接種した部位をこすることはやめてください。
接種当日はいつも通りの生活ができますが、はげしい運動は避けてください。

(4)高熱、おう吐、けいれん(ひきつけ)など特に異常な症状があった時には、接種医療機関に受診してください。

6. 予防接種の接種間隔

異なる種類のワクチンを接種する際、生ワクチン接種の場合は、ウイルスの干渉を防止するため27 日以上間隔をあけてください。不活化ワクチン接種の場合は、約1 週間経てばワクチンによる反応がなくなるため6 日以上間隔をあけてください。

予防接種の種類	間 隔
【生ワクチン】結核(BCG) 麻しん風しん混合(MR) 流行性耳下腺炎(おたふくかぜ) 水痘(みずぼうそう) ロタウイルス(1 価・5 価) 黄熱	27 日以上の間隔をあける
【不活化ワクチン】4 種混合(ジフテリア・百日せき・破傷風・ポリオ) 3 種混合(ジフテリア・百日せき・破傷風) 2 種混合(ジフテリア・破傷風) 破傷風 ポリオ 日本脳炎 ヒブ(インフルエンザ菌b 型) 肺炎球菌(13 価・23 価) HPV(ヒトパピローマウイルス) インフルエンザ A 型肝炎 B 型肝炎 狂犬病 髄膜炎菌	6 日以上の間隔をあける

同時に複数の種類のワクチンを接種後に他の種類のワクチンを接種する場合も上記表のとおりです。なお、同じ種類のワクチンを複数回接種する場合、それぞれのワクチンに定められた接種間隔があります。医師とよく相談したうえで接種を受けてください。